

「言語のモジュール性の再検討」

酒井 邦嘉^{a)} 市田 泰弘^{b)}

a) 東京大学 大学院総合文化研究科

b) 国立身体障害者リハビリテーションセンター学院

言語獲得における脳の機能分化の問題は、言語のメカニズムを理解する上で、最も重要な切り口である。言語能力が一般の認知能力と独立して発達するかどうかは、チョムスキーとピアジェの論争以来、様々な角度から議論されてきた。そして、言語機能がどのような意味で、かつどのようにして他の認知機能から独立しているかという問題は、言語のモジュール性をめぐる中心的テーマであった。近年の脳機能イメージングの発展により、この問題を新しい角度から検討できるようになってきている。以上の背景のもとで、正高氏の論文が提起する次の2つの問題について議論したい。

1. 手話の情報処理が、必ずしも優位半球の言語野に限定されない、という脳機能イメージングの知見について

この理由を考える際には、手話と身振りの関係をとらえ直すことが不可欠であると考えられる。音声言語と身振りはモダリティが違うため、後者はパラ言語として前者とともに起こることができ、しかも前者とは異なるものとして切り離すことができる。実際、脳でもそのように処理されているであろう。しかし、手話の使用においては、言語的な要素と身振りが同じモダリティに属している。言語と身振りを同時に使用する必要性、ないし利点というものは、手話使用者にも同様にあるであろう。従って、手話という言語は、その構造の中に身振りの要素を深く組み込んでいるのではないだろうか。手話には、classifier constructionsという形態統語的な語彙構造が

ある。これは、「身体的動作」や「物の形、位置関係、動き」を表す述語に用いられ、手話の手の形や位置関係、動きが、その表す意味と明らかに対応した関係をもっている。身振りが言語構造に深く組み込まれた例であろう。実際、最近のPETによる研究は、両半球の頭頂葉に活動が見られる条件の1つが、classifier constructionsの理解の場合であることを示唆している^[1]。音声言語と身振りの境界は自明のこととされているが、手話と身振りの境界は必ずしも自明ではない。今後の実験で、このような視点が盛り込まれていくことを期待する。

2. ウィリアムズ症候群が言語理解にも障害を示すことについて

正高氏は、統語的な側面からの文章理解には障害をもたらさないと結論しているが、厳密な検討を要する問題であると我々は考える。すでに、ウィリアムズ症候群で統語処理の異常が報告されており^[2]、ウィリアムズ症候群が言語的能力と空間的能力の明確な解離の証拠であるとする従来の考え方は、疑問視せざるを得ない。統語構造に関する理論を基礎としたうえで、ウィリアムズ症候群の障害の範囲を定めるだけでなく、障害されている認知機能相互の関連性と因果関係を明らかにしていくことが必要である。

[1] Emmorey, K.: Language, Cognition, and the Brain. (Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, Mahwah, 2002)

[2] Karmiloff-Smith, A. et al.: Linguistic dissociations in Williams syndrome: Evaluating receptive syntax in on-line and off-line tasks. *Neuropsychologia* 36, 343-351 (1998)